

# 幼小中一貫におけるマルチメディア教育の教材・単元開発 -1-

(1) 簗島 隆, (1) 大和浩子, (1) 作田武夫, (1) 木本一成, (2) 三田幸司,  
(2) 見藤孝二, (2) 横村弥生, (3) 金岡美幸, (3) 岡本芙充子, (4) 山本 透  
(1) 広島大学附属三原中学校, (2) 広島大学附属三原小学校,  
(3) 広島大学附属三原幼稚園, (4) 広島大学大学院教育学研究科

CXJ05574@nifty.com

## 1. はじめに

高度情報通信社会の進展に伴い、学校教育の現場においても「情報活用能力の育成」をめざし3つの下位目標（「情報活用の実践力」・「情報の科学的な理解」・「情報社会に参画する態度」）に則って、より一層系統的に展開されようとしている。そのような中で、本学園では「確かな学力を基にさまざまなメディアを駆使して多文化を理解したり、人々と国際的にコミュニケーションしたりする能力」の育成をめざして、情報教育と国際理解教育を効果的に融合する形で研究開発を進めている。

メディアの活用能力が高いことは、多文化を理解する上でもグローバルなコミュニケーションを広げていく上でも極めて重要であると思われる。例えば、国際情勢やその背景となる他国の文化を知る際、それを直接的に体験することはほとんどなく、新聞や雑誌の文字情報やニュース・ドラマ・ドキュメンタリー等の様々な映像情報として与えられることが多い。このとき、情報は必ずその発信者の意図に基づいて、「事実を再構成している」というメディアの本質を理解した上でその情報に接すれば、国際理解も多文化理解も表面的や一面的なものではなく、より多面的で深いものとなる。そのような理解の上に成される国際的コミュニケーション能力こそが、今日の情報・国際社会に必要不可欠な資質であると考えられる。

本研究では、国際コミュニケーション能力の基礎となる「大量の情報の中から必要な情報を主体的に読みとり、効果的に活用する能力」の育成を目的とした「マルチメディア学習」の幼小中一貫カリキュラムを開発する。具体的には、様々な情報に対して多面的に評

価することのできる能力、すなわち「メディアリテラシー」を軸とした「情報活用能力」を育成するための「マルチメディア学習」の単元開発（学習内容・教材開発）を行う。さらに、実践授業を通じた評価方法を併せて検討することで、幼稚園から中学校3年生に至る12年間の一貫カリキュラムに検討する。本校における情報リテラシー教育の概念図を図1に示す。

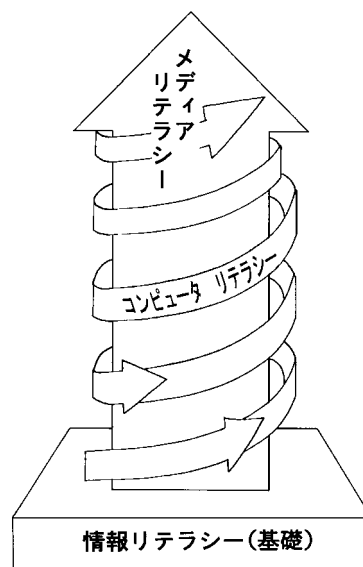


図1 本学園における情報リテラシー育成の概念図

## 2. 本研究の具体的な特色

これまで、幼稚園・小学校・中学校において「マルチメディア学習」は単一教科・領域では扱われていない。そのため、「メディアリテラシー」、「情報活用能力」、さらにはこれらの総合力として位置づけられる「情報リテラシー」について、子どもの実態は多種多様な状況にある。本研究では、「大量の情報の中から必要な情報を主体的に読みとり、効果的に活用する能力」を確実に育むためには、どの

ような単元（学習内容・教材）が子ども達の実態に即しているかを既存教科との連携を踏まえながら考察する。その具体的な特色は以下の通りである。

国際コミュニケーション能力の育成を基礎として、情報教育を捉えている。  
メディアリテラシーを軸とした情報活用能力の育成をめざした単元開発である。  
幼稚園・小学校・中学校の発達段階に即した12年間の一貫カリキュラムを開発する。幼稚園段階では、これまで培ってきた保育内容を情報教育の側面から眺め、情報教育としての新しい切り口について検討する。  
小学校段階では、NIE（Newspaper in Education）やマスメディア（例えばテレビ局など）との関連を通して「マルチメディア学習」を行う。  
中学校段階では、「情報の科学的な理解」を柱とし、その延長上に「情報活用の実践力」と「情報社会に参画する態度」の育成を捉えた「マルチメディア学習」の内容を検討する。  
発達段階に即し、多面的に評価できる評価規準・評価方法を検討する。

### 3. 研究計画と方法

この研究開発では、幼小中一貫教育の「マルチメディア学習」を通して身につけさせる能力を、幼稚園では様々な身のまわりにある情報を「理解」「活用」「判断」「発信」していくための基礎となる「情操」を、小学校においては幼稚園で培った「情操」をベースに「表現・コミュニケーション能力」を、さらに中学校では幼稚園、小学校で培った「情操」「表現・コミュニケーション能力」をベースに「情報の多面的判断能力」と捉えている。その概念図を図2に示す。

さらに、このような発達段階を踏まえながら、幼小中一貫のマルチメディア学習において、以下のような4つの資質を柱とした具体的な学習内容を考える。

情報活用の実践力  
情報の科学的な理解

情報社会に参画する能力・態度  
情報の多面的判断能力

これらの資質を育むために、各発達段階において以下のような取り組みを3年間に渡って行う。

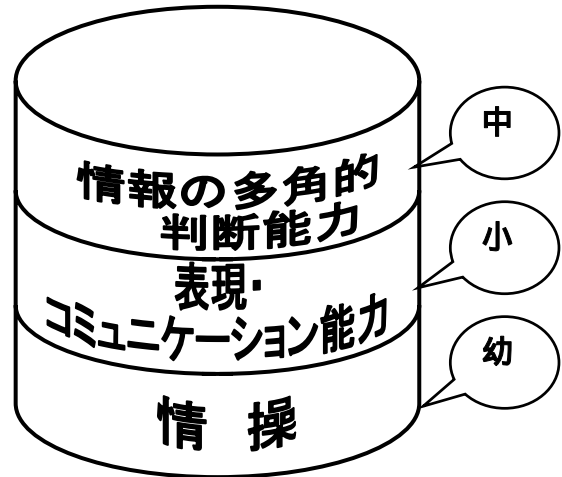


図2 一貫教育において身につけさせる能力の概念図

#### 3.1 幼稚園におけるマルチメディア学習

幼児期であるという子どもたちの特徴を考慮しながら、その成長の様子に即し、五感を通して様々な感じる力を養う。このような体験をもとにしながら、情報社会に参画する能力・態度のもとになる人とかかわりの充実を図っていく。幼児なりに身近な情報に触れ、様々な情報があることを知り、情報との出会いが楽しいと感じるなどの体験を重ねていく。コンピュータの活用も特別なものではなく、ごく自然にかかわれるように設置することにより、子どもたちが「触れてみたい、楽しいものだ」と感じることができるようにする。このような活動を通して、情報を受けたり伝えたりすることの充実感が味わえるようにするとともに、小・中学校へ繋がっていくと思われる情報リテラシーの基礎を培っていく。

#### 3.2 小学校におけるマルチメディア学習

小学校では、主に前半（1～3年生）において、自分の調べたい情報を集めること、メディアに触れ、慣れ親しむこと、自分の考えや

グループの考えをまとめて発表することなどの経験を積み重ねていく。その上で後半(4～6年生)では、社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、様々なメディア報道を多面的に判断しようとする態度を育成する。その中でコンピュータリテラシーの充実に図る。それらの活動を通して、小学校では、必要な情報を主体的に収集・選択し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる基礎的な力を育成する。

### 3.3 中学校におけるマルチメディア学習

中学校においては、情報の多面的判断能力

と情報の科学的な理解を効果的に融合させながら「マルチメディア学習」を進めていく。まず、「情報の多面的判断能力」については、様々なコンピュータを含むメディアの仕組みを知り、メディアを活用する活動を通して育まれる、多面的にメディアを判断する能力である。これらの活動を取り入れることにより将来の情報社会に参画する能力・態度を培う。また、情報を正確に伝えるための手段としての様々な情報機器を活用していくためのコンピュータリテラシーを踏まえつつ、その基礎となる情報の科学的理解の向上を図る。

これらの取り組みをもとに具体的な学習項目を考察し、つけたい力と関連させマルチメディア学習の目標とした。それを表1に示す。

表1 マルチメディア学習の目標

	幼稚園	小学校1～3年	小学校4～6年	中学校
情報活用の実践力	身近なメディアに自然にかかわりながら、その機能に親しむ。  身近に扱えるメディア機器の簡単な機能や操作がわかる。  感じたことを表現する楽しさを感じる。	簡単な文章や絵、写真を使い、自分の考えや気持ちを伝えることができる。	様々な情報機器を使い、自分の考えや調べたことをまとめて発表・発信することができるようになる。	課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達ができる。
情報の科学的な理解	五感を使って、いろいろな情報をしっかり感じ取りながら、その特性に親しむ。	身近にある情報の役割や大切さを考えることができる。	普段接している情報がどのように作られているのかを知り、目的に応じて活用することができるようになる。	情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法を理解する。
情報社会に参画する能力・態度	友だちに自分の思いを伝えたり、友だちの思いに気づき受け入れようとしたりすることができるようになる。	集めた情報をもとに、自分の言いたいことをまとめて伝えることができる。	情報を受け取る側を意識し、相手に分かりやすく発表・発信することができるようになる。	社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする。
情報の多面的判断能力	身近なメディアを通して、情報に興味や関心をもつ。	受け手側の気持ちを考えて情報を伝えることができる。 情報を検索する方法を知り、得られた情報を選択することができる。	得られた情報の真偽を考えて取捨選択したり、適切に情報を発信したりすることができるようになる。	メディアを制作・活用することを通して、メディアの社会に及ぼす影響や発信力を理解し、様々なメディアを生活に有効に利用し、多面的にメディアを判断できる力を養う。

#### 4. まとめ

本年度は「マルチメディア学習」の教材・単元開発をめざし、2004PCカンファレンス 8月4日発表の大和<sup>[13]</sup>、見藤<sup>[13]</sup>の実践例以外に様々な取り組みは授業を通して行った。その際、生徒にとって段階的を踏みながら進んでいったほうが望ましかった教材・単元もあった。中学校の事例にあるように教員が一人でこの授業に当たるのではなく、それぞれの専門性を生かしながら複数のTTによる実践を行ったほうが評価観点の精選や学習効果があがったことも実感として感じた。この実践事例は一例に過ぎないが今後も実践的・実験的な研究を地道に積み上げたものが、「マルチメディア学習」のカリキュラム開発に近づいていくものと我々は確信している。また、本研究は本学園が目指している「国際コミュニケーション能力」の育成の基盤となるものである。したがって、次のステップにおいては、本学園にある「国際交流学習開発部会」と共同し、本研究で成し得た研究成果に基づいて、国際理解をも視野に入れた「国際コミュニケーション能力」の育成に発展させる予定である。

#### 参考文献

- [1] 井上尚美, 中村敦雄 編 『メディア・リテラシーを育てる国語の授業』明治図書 (2001)
- [2] 西澤尚宏, 鎌原淳三, 春藤憲司, 塚田清志, 有木康雄, 上原邦昭, 下條真司, 宮原秀夫 "映像文法のためのカット先読み機能を備えた自動ダイジェスト生成システム" 電子情報通信学会 第13回データ工学ワークショップ (DEWS2002), March 2002
- [3] 野中拓夫 "国語科におけるメディアリテラシー教育 - 選択 a 国語「映像文法を学ぶ」 - " 放送教育・祖聴覚教育全国大会 (平成14年度)
- [4] メディアリテラシープロジェクト「メディア・リテラシーの世界」<http://www.mlpj.org/>
- [5] 日本映画・テレビ編集協会編 『図解映像編集の秘訣 映画とテレビ番組, コマーシャルから学ぶ映像テクニックのすべて』玄光社 MOOK (11) (1999)
- [6] 碓井 広義 著 『テレビの教科書 ビジネス構造から制作現場まで』PHP 新書 (2003)
- [7] 藤川大祐 編 「メディアリテラシー教育の実践事例集 情報学習の新展開」学事出版 (2000)
- [8] 日本放送協会「体験!メディアのABC」
- [9] 文部省: 情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて (1998) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/002/toushin/980801.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/002/toushin/980801.htm)
- [10] 文部科学省: 中学校学習指導要領 (1998)
- [11] 文部科学省: 小学校学習指導要領 (1998)
- [12] 文部科学省: 幼稚園教育要領 (1998)
- [13] 簗島 隆, 大和浩子, 作田武夫, 木本一成, 三田幸司, 見藤孝二, 横村弥生, 金岡美幸, 岡本芙充子, 山本 透 幼小中一貫におけるマルチメディア教育の教材・単元開発(1) 広島大学学部・附属学校共同研究紀要, 32, 121-130. (2003)